

**令和6年度
常葉大学 地域連携事業
実施報告会**

(令和6年 9月 4日)

目次

常葉大学地域連携・交流推進基本方針	2
-------------------	---

地域交流・連携推進事業 概要	4
----------------	---

地域交流・連携推進事業

令和5年度 採択事業4件

事業1. スポーツによる地域活性化を目指した 「ベルテックス静岡」との連携事業	6
--	---

事業2. 多文化共生ファシリテーター育成のための 地域自治体との連携プロジェクト2023	8
---	---

事業3. 中山間地の外国人住民へのオンライン日本語教育を 通した多文化共生意識涵養の試み	10
---	----

事業4. 音楽・日本画・物語による静岡の自然とサウンドスケープの探究	12
------------------------------------	----

令和3年度 採択事業1件

事業1. 陸上競技による教職履修者指導力育成プログラムについて	14
---------------------------------	----

教員による地域連携活動（動画配信）

常葉大学「教員による地域連携活動〔動画配信〕」のご案内	18
-----------------------------	----

事例1. 地域公共図書館における学生主体の多文化サービス支援活動	19
----------------------------------	----

事例2. 静岡市ってどんな街？しずおか日帰り移住体験ツアー	20
-------------------------------	----

事例3. 富士市における副業・兼業人材の活用 ：個人の「強み」で企業の「悩み」解決へ	21
---	----

事例4. 令和5年度 NEXCO 中日本との共同研究 新東名高速道路 静岡 SA(上り)の価値創造に関する情報学的研究	22
--	----

事例5. 人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討	23
----------------------------	----

常葉大学・常葉大学短期大学部地域連携・交流推進基本方針

[平成 27 年 12 月 14 日制定]

[令和 6 年 1 月 22 日改定]

1. 地域連携・交流の基本理念

常葉大学（以下「本学」という。）の3つの教育理念（知徳兼備、未来志向、地域貢献）の実現に資する「ナショナル～ローカルな次元」の地域連携・交流にかかる諸活動を積極的に支援・推進することを通して、学校法人常葉大学の建学の精神である「より高きを目指して～Learning for Life～」が理想とする美しい心を持ち、より高い目標に向かってチャレンジし、学び続ける人間像の具現化を図るとともに、地域社会の活性化・進展に資するものとする。

2. 地域連携・交流の目的

本学が取り組む地域連携・交流は、地域社会の動向やニーズを的確に捉えて、地域社会の人的基盤を支え、地域社会や地域経済の発展等に寄与することを目的として、次に掲げる事業等を展開する。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能の発揮
- (3) 本学の資源を活かした地域社会に対する協力・支援
- (4) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
- (5) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

3. 地域連携・交流の基本原則

本学が取り組む地域連携・交流は、以下の諸原則のもとで行うものとする。

- (1) 効果性：本学の3つの教育理念の実現に対し効果的であると認められるもの
- (2) 組織性：全学的ないし学部・学科等の単位で組織的に実施するもの
- (3) 計画性：中長期の展望のもとで計画的に事業を実施するもの
- (4) 公平性：交流事業への参加の機会が学生・教職員に平等に開かれていると認められるもの
- (5) 互恵性：連携先と互恵的な関係性のある事業を実施するもの

4. 地域連携・交流の事業内容

本学が取り組む地域連携・交流の事業内容は、次のとおりとする。

- (1) 地域の活性化等を担う人材の育成
 - ① 地域人材の育成のためのカリキュラム・授業内容の充実
 - ② 正課内外での地域貢献活動の実施

- ③ 学生の地域での就労促進
- ④ 卒業生に対する継続的な学習機会の提供
- (2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能発揮
 - ① 教育研究成果の情報発信及び成果還元
 - ② 多様な学習機会の提供
 - ③ 社会への提言活動
 - ④ 学生の人的資源の活用
- (3) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
 - ① 共同研究(商品開発等)の実施
 - ② 地域課題解決のための共同事業の実施
 - ③ 起業及びベンチャービジネス等への支援活動
 - ④ 地域活性化のためのイベント・実践報告会等の実施及び支援
- (4) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成
 - ① 実践報告会・シンポジウム等の開催
 - ② 実践事例集の作成・刊行
 - ③ 研究推進、教育改善等に対する連携・交流事業の効果検証

5. 地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結

地域の特性及びニーズに応じた地域連携・交流事業を展開するため、地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結を促進する。

6. 自己・外部資金を活用した地域連携・交流事業の実施

本学の専任教職員が基本理念・基本原則に沿った地域連携・交流活動を主体的に推進することができるよう、学内における助成金の交付、外部資金への応募を促進する。

7. 地域連携・交流にかかる推進組織及び環境整備

- (1) 地域連携・交流の充実及び円滑な推進等を図るための学内体制を構築する。
- (2) 地域連携・交流事業の充実を図るため、学内外の関係者から成る連携推進組織を整備・運営するなど、連携推進体制及び環境の構築を進める。

地域交流・連携推進事業 概要

本事業は、本学の教職員が個人およびグループで地域住民や関係機関等と連携を図って地域との交流・連携事業の取組みに対して支援（所要経費の一部を交付）をするものです。

助成要件及び条件

地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもののほか、次のすべてに該当し、大学としてのメリット又は効果があると認められるものに対して補助をする。

- (1) 事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの
- (2) 本学が主体性をもって実施するもの（単なるボランティア活動又は行事への協力は対象外とする。）
- (3) 一過性のイベントや行事ではないこと
- (4) 地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等から資金、人的な支援又は協力等が得られるなど、地方公共団体等との共同又は連携が明らかであるもの

助成対象事業

次のいずれかに該当する事業に対して助成をする。

- (1) 地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (2) 本学の研究成果等を地域に還元又は情報発信（成果の報告又は発表等）することを目的として実施する事業
- (3) 産官学(産学又は官学も含む。)連携により地域や産業の活性化等を図ることを目的として実施する事業
- (4) その他学長が特に認める事業

交付対象金額

1 事業に対して、原則として 500 千円を上限とする。

地域交流・連携推進事業

～令和5年度 採択事業4件～

～令和3年度 採択事業1件～

令和5年度採択

1

スポーツによる地域活性化を目指した 「ベルテックス静岡」との連携事業

事業担当者

教育学部生涯学習学科 教授 木宮敬信（代表）、
健康プロデュース学部心身マネジメント学科 教授 木村佐枝子、経営学部経営学科 准教授 山田雅敏、
健康科学部静岡理学療法学科 准教授 栗田泰成

目的・概要

本事業は、プロスポーツチームを核とした連携事業である。地域貢献活動を研究・教育に受け込ませるアクションリサーチの一環として、地域活性化を目的としたスポーツチームとの連携を行う。学生のマンパワーを提供するボランティア派遣ではなく、教員および学生の専門性を活かした、両者がWinWinの関係を築くことが可能となる連携を目指す。学生やチームにとってのメリットに加え、スポンサー企業にとっても、学生とともに活動していく長期インターンシップの側面を持ちリクルート活動につなげられることや、企業の若手社員研修の側面を持つことが可能である。なお、本事業は他大学生とのコラボレーションも含まれている。本活動に協力いただいている他大学所属教員の協力で、常葉大学12名のほか、静岡大学5名、静岡英和学院大学4名、静岡産業大学1名の学生が参加した。（他大学の学生経費は自己負担）

事業内容・方法

令和5年度は、令和2年度から4年目の採択となり、これまでの経験を活かして、ホームゲームイベントを含み、合計14回の活動（ミーティング、イベント等）を実施した。これまで同様、シーズン開幕前の研修やアイスブレイクに時間をかけ、まずは属性の異なる学生同士のコミュニケーションの促進に努めた。特に、本事業は他大学の学生も参加し、大学間を越えた横のつながりを作ることも大きな目的となっているため、この部分については丁寧に実施した。本年度は、ホームゲームに加えて、東静岡駅アート&スポーツ広場で実施されたカレッジイベントにブース参加し、チームのアピールと共にオリジナルフード、ドリンクの販売を行った。また、ホームゲームでは、スポンサー企業と連携し、オリジナル応援ハリセンを制作し、来場者7,000人に配布した。また、会場内企画として、チームオリジナルビール「ベルスター」の会場内販売企画を実施、当日の販売を行った。これらの取組においては、いくつかの企業にスポンサーとして参加してもらい、学生への指導もお願いした。ホームゲームの際には、学生組織「ベルカレッジ」として必ず大型スクリーンで紹介し活動の認知度を高めた結果、令和6年度に向けて多くの参加希望や問い合わせがあった。

連携先企業：ベルテックス静岡（母体チーム運営会社）、ウェストコーストブルワリング（ゲーム会場でのドリンク販売企画協力）、ベルメシ（イベントでのオリジナルドリンク開発）、セブンセンスグループ（ハリセン作成協力）、販売促進研究所（ハリセンデザイン協力）



東静岡駅アート&スポーツ広場でのイベント



ホームゲームイベント

来場者プレゼントとして学生が作成した応援ハリセン（制作費はスポンサー企業負担）



事業成果

参加した学生にとっては、他大学の学生との交流や、企業との連携等、貴重な体験学習の場となったと考えている。また、スポーツ興行に関心のある学生にとっては、ホームゲーム運営の様子を学ぶことができ、将来の進路選択に役立てられた。参加学生からは、本事業を通して「社会人に求められる資質能力を学ぶことができた」「興行である以上、営利を求めなくてはならず、制約のある中での商品企画等が勉強になった」「グループ活動の進め方を学んだ」等の感想が寄せられ、概ね当初想定していた成果を上げることができたと考えている。なお、チームはB2リーグ昇格初年度ながらも、プレイオフに進出するなど成績や入場者数で当初の目標をクリアすることができ、令和6年度シーズンへも期待が高まっている。

今後の展開

令和6年度も同様の内容で行う予定であるが、他大学や企業からの参加希望が増えており、これまで以上の連携活動が期待できる。常葉大学からも新たに造形学部からのゼミ参加が内定している。その他、市内の専門学校の参加希望もあるので、参加学生数はこれまでの3倍程度を見込んでいる。また、ホームゲームでのイベント開催だけでなく、ベルテックス静岡が目指す街作りに関連した様々な活動にも参加し、地域活性化に向けた活動を行っていきたいと考えている。また、就職活動の一環として、スポンサー企業と学生をつなぐ機能も強化し、参加者相互にメリットのある活動としていきたい。

事業担当者

外国語学部英米語学科 教授 良知恵美子（代表）、
外国語学部グローバルコミュニケーション学科（以下 GC 学科とする）教授 増井実子、教授 谷誠司、
教授 江口佳子 教育学部初等教育課程 教授 白鳥絢也、教育学部生涯学習学科 准教授 那珂元

目的・概要

本事業は、本学が静岡県の多文化共生教育の拠点となることを目指し、将来的に「多文化共生ファシリテーター育成プログラム」を設置するため、地域自治体（静岡県焼津市）と連携し、教員の専門性を活かしながら、実践的な多文化共生活動を行うことを目的としている。具体的には、以下3点①多言語による情報提供、②外国籍児童の支援、③コミュニケーションの支援を中心に実施する。この計画に基づき、本学の学生が「図書館等を利用した子育て支援」、「日本語教室の支援」、「国際交流イベント支援」の活動を行った。また、これらの事業において、学生が多文化共生に主体的に関わることで、どのように意識が変化するのか、大学での学びをどのように活用できるのかを、活動の事前・事後に学生の考えや感想をとりまとめた。その知見と経験を集積して、「多文化共生ファシリテーター」の育成に活用する。

事業内容・方法

A. 外国につながる児童生徒のための進路ガイダンス

令和5年7月30日、焼津市和田公民館で開催。主催は焼津市市民協働課。発表者として、英米語学科生2名、GC学科生2名が登壇し、外国にルーツを持つ児童及び生徒たちに、大学進学までの自らの経験を語った。会場にはブラジル、フィリピン、中国などにルーツがある多様な背景を持つ子ども及びその保護者が集まり、進路に関する疑問や不安について質疑応答が行われた。発表した学生たちは、地域で暮らす同じ背景を持つ子供たちが進路を切り開くために、自分たちの経験が役立つことが分かり良かったと感想を述べている。見学に来場していた学校関係者や支援員から、外国にルーツを持つ大学生がどのような道をたどり、苦勞を乗り越えて現在に至っているのかを知ることができ、今後の学習や言語支援の活動に参考になったという感想も寄せられた。

B. 日本語教室サポーター

焼津市は令和4年度から日本語を学んだことのない外国人住民を対象に、地域の日本人との交流を通して日本語を学ぶ「はじめての日本語教室」を実施している。この「はじめての日本語教室」に日本語サポーターとして、本学の学生11名が参加した。日本語サポーターとは、教室で対話や交流を通じ、学習者が日本語に興味を持って取り組むことができるよう、手助けをする役割を持ち、事前養成講座にも参加をする。サポーター活動は学期内の実施で全10回の授業であったが、特に大きな問題もなく、終了した。今回の日本語サポーターの様子は、焼津市役所の多文化共生事業のwebpageや焼津市国際友好協会のFacebookで紹介されている。焼津市側の担当者からも学習者に寄り添い、積極的に話しかけようとする本学学生ボランティアの姿勢を高く評価して下さった。参加学生へのアンケート調査では、教室の目的やサポーターの役目にあるように教えることよりも、対話を楽しむ姿勢の大切さ、やさしい日本語でコミュニケーションが取れることへの驚きや在住外国人へのポジティブな意識の変化などがみられており、小さいながらも事業の成果の1つとも言える。

C. やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu」を活用した多文化共生学習

焼津市国際交流協会が主催し、焼津市市民協働課が実務を担当する本事業には、外国語学部 GC 学科の学生が実行委員として企画・運営に携わっている。令和5年度は14名のGC学科生が参加し、5月より活動を開始して企画を行った。10月29日の当日は約700人の来場者があった。①無料体験ブースの運営：「楽しい日本のあそび」をテーマに、日本のお祭りをイメージしながら、簡単に楽しめる「遊び」（輪投げ、コマ回し、コップでランタン）と「お茶の飲み比べ」を行い、来場者に楽しんでもらえるブースを運営した。②当日の会場運営スタッフ：司会、受付、保安、ステージとして、会場の運営を支えた。活動後、「みんなで一緒に何かを楽しむということは、何よりの国際交流になる」という感想が見られた。また、GC学科の「学生海外・学外活動報告会」（1月17日）で報告を行い、他の学生にも経験を共有した。

D. 多言語読み聞かせ

焼津市在住の外国籍住民による市立図書館の活用を促すこと、また、地域の子供たちが外国文化に触れる機会を増やすことを目的として、外国語学部英米語学科生4名、GC学科生2名が協働して、2回実施した(第1回目:7月30日 焼津市和田公民館、第2回目:10月29日 焼津文化会館)。実施の2ヶ月前から準備を開始して、チラシの作成(日本語・英語・ポルトガル語)や絵本の選定、子どもたちと童謡を歌って遊ぶ企画を立てた。実施後、焼津市役所と焼津市立図書館から、学生が子供たちとコミュニケーションをとりながら行うことで、子供たちと一緒に楽しんでおり、学生らしい工夫がされていたと評価を受けた。プロジェクトに参加した学生からも、授業で学んでいることを活かすことができ、良い経験になったという感想が寄せられ、多文化共生の社会的課題に具体的に取り組む有意義な機会となった。

E. 日本語・英語による読み聞かせ、館内サインの英訳版作成

本プロジェクトでは、静岡市立御幸町図書館と連携し、学生10名(外国語学部英米語学科2名、短期大学部日本語日本文学科1名、教育学部生涯学習学科7名)が参加して、①「日本語・英語による絵本読み聞かせ」、及び②「館内サインの英訳版作成」の2つの多言語・多文化サービスを令和5年9月より実施した。まず、令和5年9月に、連携活動先である静岡市立御幸町図書館を参加学生と共に訪問し、多文化サービス担当職員との打ち合わせ、図書館施設内の見学、及び参加学生が行う支援内容を確認・共有した。また参加学生のグループ分けも実施した。令和5年11月に、静岡市立御幸町図書館の「御幸町図書館開館20周年の先行イベント」の1つとして、参加学生が、①「日本語と英語による絵本読み聞かせ」を実施した。また参加学生は、イベント告知用のチラシや子供へのプレゼント、館内ポスターの制作も担当した。また、令和5年9月から令和6年2月の期間では、②「館内サインの英語版作成」の活動として、館内サインの多言語化、外国籍の利用者とのコミュニケーションツールの開発、およびカウンター内で使用する「応対会話集」のバージョンアップ版をそれぞれ制作した。制作物は、令和6年2月下旬に、制作に携わった学生たちが御幸町図書館を直接訪問し図書館職員に納品した。本プロジェクトを通じて、参加学生たちは、図書館の多文化サービスの向上に貢献すると同時に、互いを尊重し合い、協働して目標を達成する協働学習の実践を通じて成長することができた。

F. 論文作成

常葉大学『外国語学部紀要(第40号)』(pp.13-29, 2024)に論文をまとめ投稿した。論文題目は「多文化共生ファシリテーターを育成するための地域貢献活動の教育的効果とは何か」である。本稿では、「多文化共生ファシリテーター育成のための地域自治体との連携プロジェクト」(代表:良知恵美子)に参加した本学学生に対して行ったアンケート調査について、具体的な分析を行った。学生がフィードバックをすることにより、本プロジェクトへ参加したきっかけや活動中の気づき、成果と課題、教育的効果等を明らかにし、今後の活動の改善と発展に役立てることを期したものである。

事業成果

将来的には本学のカリキュラムの中に「多文化共生ファシリテーター育成プログラム」が導入されることを目指している。卒業後に本学の学生が多文化ファシリテーターとして地域社会で活躍するためには、多文化共生の現状、異文化理解、外国人支援の技法、日本の教育・社会保障制度への理解、語学力といった知識や技術を学ぶことが必要となる。そのためには、「座学」と「実践活動」の両面を備えた育成プログラムが必須であるが、これまでの事業が「実践活動」の面について具体的な方法や知見を蓄積する貴重な機会となり、育成プログラムを完成へと導く成果へとつながった。

また、自治体側も本学との連携により、多文化共生に向けての各種事業を安定的に遂行することが可能となり、本学の人材に高い期待を寄せており、双方にとって大きなメリットがある活動が継続できている。

今後の展開

今年度の連携事業としては、事業内容をさらに発展させることはもちろんであるが、連携を行っている自治体とのつながりを継続していくことが最も重要であると考えている。活動を蓄積することで、本学の地域連携の安定的な基盤が構築され、学生自身も複数年活動に参加することで、地域と連携することに自らが貢献できることを自覚できることが期待できる。既に事業に協力した学生が次の学年へと事業を引き継ぎ、学部学科を越えての学生間の交流も実現できていることは、大きな成果であると考えている。この状況をさらに発展させていくためには、事業の継続が前提となる。来年度の事業の申請は見送ったが、別の形で自治体(焼津市)との連携を継続していく方向性は、先方とも確認できている。

また、今年度の事業計画でも示されているが、これまでの実践的活動を研究レベルで検証して行くことは、今後の活動が意義あるものであることを裏付けることにつながる。具体的には参加学生へのインタビューを通して、彼らの成長(変容)の質的分析を行い可視化していくことに取り組んだ。これらの資料を論文としてまとめ、学内外国語学部紀要へ成果を発表することができた。これは、これまでの事業の集大成といえるものであり、研究ベースでそれを総括できたと思う。

中山間地の外国人住民へのオンライン日本語教育を通じた多文化共生意識涵養の試み

事業担当者

外国語学部グローバルコミュニケーション学科 教授 坂本勝信（代表）、教授 谷誠司、
経営学部経営学科 教授 山下浩一

目的・概要

本事業では、公益財団法人浜松国際交流協会（以下「HICE」）との連携にて昨年度と同様に、①生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと、②常葉大学学生の多文化共生意識を涵養すること、③多文化共生社会実現に向け、日本人住民の意識向上を図ることの、3点の目的を掲げた。以下は、主な実施内容である。

- 1) 天竜日本語教室の学習者を対象に月に1回（6月～3月）オンライン日本語教育を行う（計10回）。
- 2) 一般の日本人住民を前にした、1)の成果発表会を令和6年2月に実施する。
- 3) HICEの日本語教室（U-ToC）の授業への協力及び、授業参観・交流を行う。
- 4) 天竜日本語教室の学習者が外国語学部の授業において日本での生活体験などについて講義する。

事業内容・方法



オンライン授業の様子

オンライン天竜日本語教室では、好きなこと・もの・場所・人などを語る「Show & Tell」という取り組みを行った。大学生は、学習者に寄り添いながら彼らの思いやエピソードなどを引き出し、文章化する手助けをするとともに、2)の成果発表会におけるスピーチやポスター発表（交流会）が充実したものとなるよう裏方の役割を担った。たとえば、スピーチ用の写真、イラストを適宜パワーポイントに盛り込んだり、ポスター発表（交流会）のために、日本人住民との対話に生

かせる相槌や聞き返し、確認の表現を導入・練習したり、ポスターの作成に従事したりした。また、成果発表会は、前年度に続き、全ての学習者と大学生が初めて顔を合わせる場となり、同年代の者同士が真の交流を行う機会となった。当日は、異国の地日本で日本語のシャワーを浴び続ける外国人の気持ちを来場者に理解してもらうべく、大学生による外国語でのスピーチ（英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国語）も披露された。スクリーンには様々



成果発表会（ポスター発表）2月



成果発表会（常葉大生による外国語 de スピーチ）

な外国語で書かれた原稿にやさしい日本語が添えられた。これは、日本人住民の多文化共生意識を涵養することが目的であった。

一方、今年度初めての試みとして、天竜日本語教室の学習者アイディル氏に外国語学部の授業に登壇いただき、自分の国や日本での生活、夢などを語ってもらったり、本事業参加者である大学生に授業内で活動報告をしてもらうなどした。

なお、事業を通じ、HICE からは、オンライン日本語教室・成果発表会の運営に係る事前準備、会場設営や事後処理に至るまで多大な協力を得た。

事業成果

本学の学生は、1) 2) の事業に 90 名が、また、3) の U-ToC におけるプロジェクトワークのインタビューとしての協力及び、授業参観・交流等に 10 名が参加した（延べ人数）。大学生の参与は、学習者の日本語力向上や日本人の考え方をすることに一定の役割を果たし、日本社会へのスムーズな適応に繋がったと思われる。また、本学学生にとっては、地域日本語教育の実際に触れる貴重な機会となった。



成果発表会（終了後の集合写真）

今年度のオンライン授業でも、相槌や聞き返し、確認などコミュニケーションに欠かせない日本語表現を場面や相手に応じて適切に使い分ける社会言語能力の養成に力を入れたが、その学びを成果発表会のポスター発表（交流会）で学習者が実践する様子が観察された。同時に、大学生も社会言語能力の育成を意識した教案作成をし授業に臨めたことが、事業後の振り返りレポートなどから読み取れた。また、2) の成果発表会来場者対象のアンケートには、「日本人には気付けない点などに気付くことができ幅が広がった。日本語は難しいはずなのに上手に発表していてすごいと思った」「多文化についてもっと知りたいと思いました。すてきな発表ありがとうございました」などのコメントが記されており、外国人の目を通し日本や日本人を俯瞰したり、懸命に日本語を学びながら生活する学習者の様子に感銘を受けたりする様子が窺えた。

また、上述の通り令和 5 年度は、天竜日本語教室のアイディル氏に外国語学部の科目にて講義いただいた。受講者からは、「お話を聞いてよく見る外国人の方々が様々な苦しい経験や大きな決断をしていることを知り、見方が変わりました」「もし外国人の方と接する機会があったら、積極的に話しかけたいと思いました」などの感想が述べられており、生の声を聞く大切さが知れる機会となった。

今後の展開

令和 6 年度も「2 つの自治体との連携による日本語教育を通じた日本人住民の多文化共生意識涵養事業」というテーマで本学の地域交流連携推進事業に採択され、5 月からオンライン授業を開始している。参加学生は従来の 10 名から 20 名に倍増し、教育実習の意味合いもある活動に取り組んでいる。

音楽・日本画・物語による 静岡の自然とサウンドスケープの探究

事業担当者

短期大学部音楽科 教授 井上幸子（代表）、短期大学部日本語日本文学科 准教授 宮本淳子、
短期大学部保育科 教授 遠藤知里、講師 木下藍

目的・概要

静岡県の豊かな自然環境は、同時に豊かな音環境・音風景（サウンドスケープ）を擁する。そこで、すべての世代への「原体験的音楽体験」を目的として、短期大学部の3学科の特色を活かした地域貢献活動を展開する。

事業内容・方法

多様な年齢層への展開を視野に入れ、音楽・美術・物語が融合した「サウンドスケープ教育」の教材開発を行い、それを活用するイベントを実施する。イベントに学生が参加することで、地域の自然環境への理解を深めるとともに、自らの専攻分野と地域社会との結びつきに気づく機会とする。

連携先の静岡県立朝霧野外活動センターには、以下のご協力を頂いた。①参加者募集広報と会場使用の便宜（令和5年9月18日実施。幼児を対象とした自然体験プログラム）。②静岡県立朝霧野外活動センター主催事業「朝霧カーニバル」での出展機会の提供（令和5年11月5日実施。サウンドスケープをテーマとした体験コーナー）。

事業内容は、以下の通りである。

1. 「あつめてみよう ひかりとおと」静岡県立朝霧野外活動センター（令和5年9月18日）

「とことこキャンプ」（主催：とことこキャンプ実行委員会（代表：遠藤知里）、連携協力：静岡県立朝霧野外活動センター）とジョイントする形で、講師に花岡清美氏（音楽療法士）を招聘し、年中児と年長児計27名を対象とした野外教育プログラムを実践した。学生16名（音楽科1名、保育科4名、保育学部11名）がボランティアとして参加し、子供たちの指導に当たった。

1) 探索・素材集め・作る・試す

花岡清美氏のコーディネートのもと、本学保育科と常葉大学保育学部の学生が、周辺の森を子供と一緒に散策し、気に入った音、気になる音、好きな場を選び、見つけたものを使って遊んだり、制作の材料となる木の実や葉、小枝、石などを採集するなどして過ごした。自然の中で、子供達が様々な「ひかりとおと」を見つけ、互いにそれについて言葉を交わし、イメージをふくらませていた。十分に身体を使って遊ぶことに加え、自由に様々な遊びを体験できる



写真1 木洩れ日の中での活動

よう、キャンプサイト内の木陰に、制作の材料コーナーを設置した。更に、森の中の数か所に枝の間にビニールシートを張り、木漏れ日やライトの光で遊べる場所も作り付けた。子供達はそこで自由に素材を触ったり、使い方を試したり、音色を聴いて、探索した。また、並行して、本学音楽科のクラリネット専攻学生が、森林内での環境音と映像を収集し作品制作を試み、動画作品にまとめた（監修：井上幸子）。

2) 森の音楽会

プログラムの最後に行われた「森の音楽会」は、音楽科学生と井上幸子による木管楽器クラリネットの二重奏、子供達が持ち寄った「ひかりとおと」の作品、子供達が遊びの中で生み出した楽器や打楽器による即興演奏が相俟った、美しい時空間であった。



写真2 森の音楽会

2. 「朝霧カーニバル」 出展 静岡県立朝霧野外活動センター（令和5年11月5日）

静岡県立朝霧野外活動センター主催の地域交流事業において、上述の「あつめてみよう ひかりとおと」の一部を体験できるコーナーを出展した。（保育科学生2名、指導：遠藤知里）

事業成果

活動の様子は、下記の動画を参照されたい。

あつめてみよう ーひかりとおとー 静岡県立朝霧野外活動センター 令和5年9月18日	「森の音楽会」 ～ 一緒に楽しもう ～ https://youtu.be/GkT50PnZ3tA	
	「森で きこえる 音」 https://youtu.be/gvFtVDmBnY4	

参加学生の振り返りから、主体的に子供と関わる中で、子供の感性に対する率直な気づきはもちろん、自ら「問い」を発見し、解決策を模索する姿や保育観の醸成につながるであろう記述も確認でき、交流の場での体験が子供理解と実践力の向上につながる事が察せられた。また、サービスラーニングの観点からは、本事業での体験において、実際に子供と接したからこそ認識し得る物事を、自らの専攻の学びに立脚した視座から捉え直し、新たな知識の獲得を実現させている（あるいは、実現させようとしている）ことが、振り返りの記述から読み取れた。

今後の展開

2年間継続しての課題として、地域交流活動の回数が少ないことが指摘されていた。また、本事業のはじまりは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大対策という必要から生じた動画作成・配信技術を活用した地域貢献構想であったが、コロナ禍も去りつつある昨今、再び対面での交流の場が地域の中で求められるようになってきている。そこで、令和6年度は「しずおかの人と自然が響きあう ヒューマン・サウンド・スケープの探究」をテーマに、草薙キャンパスを中心とした活動を加え、実際に人と人とが出会い、心触れ合う機会を創出する。

事業担当者

健康プロデュース学部心身マネジメント学科 講師 大川昌宏

目的・概要

現行の中学校の学習指導要領における第1学年及び第2学年では、記録の向上や競争の楽しさや喜びを味わい、技術の名称や行い方などを理解し、基本的な動きや効率のよい動きを身に付けることができるようにする。その際、動きなどの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにすることが大切である。また、陸上競技の学習に積極的に取り組み、ルールやマナーを守ることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めることなどに意欲をもち、健康や安全に気を配ることができるようにすることが大切とされ、第3学年では、記録の向上や競争の楽しさや喜びを味わい、体力の高め方や運動観察の方法などを理解するとともに、各種目特有の技能を身に付けることができるようにする。その際、動きなどの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにすることが大切である。また、陸上競技の学習に自主的に取り組み、ルールやマナーを大切にすることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にすることなどに意欲をもち、健康や安全を確保することができるようにすることが大切である。とされている⁴⁾。また、高等学校の学習指導要領（2018）においては入学年次にこれまでの学習を踏まえて、記録の向上や競争及び自己や仲間の課題を解決するなどの多様な楽しさや喜びを味わい、「各種目特有の技能を身に付ける」ことなどができるようにすることが求められる⁵⁾。とされており、中学校および高等学校ともに技能面では陸上競技の短距離走が取り上げられており、中学校では50m～100m、高等学校では100m～200m程度を弾力的に取り扱うように記載され、短距離走疾走中における課題が報告されている⁶⁾。保健体育の教員免許取得を目指す大学生には各種実技の実施だけではなく、指導と評価の一体化が求められる。そこで本研究の目的は、陸上競技短距離走を取り上げ、動作を見抜く能力（観察的動作評価方法）について検討することとした。

事業内容・方法

1) 対象者

中学校あるいは高等学校（または両方）の保健体育教員免許取得を目指す大学生（陸上競技部員あるいは陸上競技経験者を除く）40名とした。本評価者は体育実技（陸上）を履修しており、初回時に口頭にて研究協力依頼をした。試技者は授業期間内に100m走の計測を行った男子大学生のうち疾走タイムで各1秒ほどの差がある3名を抽出し、100m走とは別授業日に60mの全力疾走を1回行わせた。評価者

には試技者のタイムを伝えなかった。

2) 分析区間および観察的動作評価

オールウェザー100m 走路の 30m 地点の右側方 20m、高さ 1m に設置したビデオカメラ (EX-100PRO、CASIO) により毎秒 30 コマで固定撮影を行った。分析対象区間は 1 ストライド分とした。学習者の動作評価については自由記述とし、陸上競技を専門とする著者が KH Coder 3 を用いて回答を分析した²⁾。

事業成果

評価者の一例として、身体部位のうち上肢や上半身といった部位に着目した回答が多かった。これらの観察で学んだことを生かし、地域での陸上教室で指導を行った。なかでも浜松市スポーツ協会主催の陸上教室で参加者満足度調査を行ったところ、1 年生 : 79%、2 年生 : 100%、3 年生 : 60%、4 年生 : 80%が大変満足または満足と回答していた。

今後の展開

陸上競技の種目数 (歩く、走る、跳ぶ、投げる) は多い。中学校の学習指導要領内では短距離走・リレー、長距離走、ハードル走、走り幅跳び、走り高跳びが取り上げられ、高等学校の学習指導要領では中学校の各種目に加えて三段跳び、砲丸投げ、やり投げといった種目も挙げられている。陸上競技を専門としていない児童・生徒の短距離疾走動作の評価や、陸上競技を専門とする者とそうでない者の評価には着眼点に違いがあることなどが報告されている^{1, 6, 7)}。本研究は中学校あるいは高等学校 (または両方) の保健体育教員免許取得を目指す大学生が大学生の疾走動作を観察してどこに着目して評価を行うのかについて検討した。本学では浜松市教育委員会や舞阪小学校、学園祭時において児童・生徒の運動指導を開催しているが、陸上競技を専門として行ってきた大学生のみが陸上競技の短距離走に必要な観点を持って指導を行うのではなく、陸上競技を専門としていない大学生も指導者として地域に貢献していける人材を養成していきたい。

〔参考文献〕

- 1) 比留間浩介. スポーツ教育学研究, (2020).
- 2) 岩森三千代. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, (2020).
- 3) 加藤謙一. 体育学研究, (2006).
- 4) 文部科学省. 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 保健体育編, 東山書房, 京都, 2023, 85-101.
- 5) 文部科学省. 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 保健体育編, 東山書房, 京都, 2023, 77-94.
- 6) 西村三郎. スポーツ教育学研究, (2016).
- 7) 鈴木康介. 体育科教育学研究, (2016).

教員による地域連携活動
～動画配信～

教員による地域連携活動（動画配信）

日頃より、常葉大学の地域連携活動にご理解とご協力を賜わり、ありがとうございます。

地域貢献センターでは、地(知)の拠点としての大学の役割・機能を発揮するため、本学における地域交流・連携活動を地域社会に広く周知すること目指し活動しています。

コロナ禍で活動や発表の場を失った事業が多い中、より多くの方に向けて本学の教育研究活動を発信することを目的に、教員が地域で実施した活動成果等を動画で発表する取り組みを実施することとなりました。

日頃の地域活動等の成果を発信し、本学が取り組んでいる地域連携活動を知っていただく機会として、これからも発展的な地域連携活動が促進されることを期待しています。

本日紹介した動画や、その他の教員による地域連携活動の動画は、常葉大学ホームページの地域貢献特設サイト内でいつでもご覧いただく事ができます。

<https://www.tokoha-u.ac.jp/community/initiatives/communityactivity/>



大学ホームページより、「地域貢献」→「地域・社会貢献活動 事例紹介」→「教員による地域連携活動（動画配信）」に進んでください。

🏠 ホーム > 地域貢献 > 地域・社会貢献活動 事例紹介 > 教員による地域連携活動（動画配信）

教員の地域連携活動の成果報告（動画配信）について

〔ご挨拶〕

地域貢献センターでは、地(知)の拠点としての大学の役割・機能を発揮するため、本学における地域交流・連携活動を地域社会に広く周知すること目指し活動しています。

コロナ禍で活動や発表の場を失った事業が多い中、より多くの方に向けて本学の教育研究活動を発信することを目的に、教員が地域で実施した活動成果等を動画で発表する取り組みを実施することとなりました。

日頃の地域活動等の成果を発信し、本学が取り組んでいる地域連携活動を知っていただく機会として、これからも発展的な地域連携活動が促進されることを期待しています。



「富士市で働く」を楽しむ
ワーケーションモニターツアー

清水・三保・蒲原『想巡』
～歴史に、自然に、想いを巡らす「しずおかワーケーション」冊子制作～



📄 (要旨) 「富士市で働く」を楽しむワーケーションモニターツアー (PDF ファイル 0.47MB)



📄 (要旨) 清水・三保・蒲原『想巡』～歴史に、自然に、想いを巡らす「しずおかワーケーション」冊子制作～ (PDF ファイル 0.46MB)

人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討
～大川生活ガイドブック作成と復興支援～

「健康長寿のまち」普及啓発向上に向けた分かりやすい広報戦略
地域づくりのサービスデザインを考える

動画配信

1

地域公共図書館における学生主体の多文化サービス支援活動（日本語・英語による読み聞かせ、館内サインの英訳版作成）

事業担当者

教育学部生涯学習学科 准教授 那珂元（代表）、外国語学部英米語学科 教授 良知恵美子

目的・概要

令和3年度からの焼津市立焼津図書館での多文化サービス支援の経験にもとづき、令和5年度は静岡市立御幸町図書館と連携し、学生主体による多言語・多文化サービスの支援活動として、①「日本語・英語の絵本読み聞かせと手遊び」、および②「館内サインの英訳版作成」の二つの活動を実施した。実施期間は、令和5年9月から令和6年2月までの約5ヶ月間で、学生10名（外国語学部英米語学科2名、教育学部生涯学習学科7名、短期大学部日本語日本文学科1名）が参加した。支援活動①は「御幸町図書館開館20周年先行イベント」として扱われ、外国ルールの方を含む多くの親子が参加した。広報用チラシも参加学生が作成した。また、支援活動②では、書架間の英語表記の分類POPや各掲示物の英訳版、コミュニケーションツール「図書館のいろんなサービスシート」の英語翻訳、カウンター内の多言語対応「応対会話集」のバージョンアップ作業をそれぞれ行った。成果物は令和5年2月に学生が図書館職員に直接納品した。

事業成果

本活動の成果は3つある。第1に、参加学生は、本活動における協働的な学びを通じて社会人としての基礎力・応用力を身につけた。第2に、大学との連携は、図書館職員に新しい刺激を与え、図書館における多言語・多文化サービスの発展に貢献できた。第3に、本事業が関わったイベントの参加者や図書館利用者に対して、多文化共生の意識を喚起したという点で、地域の多文化共生推進に寄与することができた。今後は、本事業の経験を活かし、多文化ファシリテーター育成プログラムの策定に向けた研究活動へ繋げると同時に、高校生を含めた地域在住のさまざまな市民に参加してもらおう活動に拡大していきたい。



左：「日本語・英語による読み聞かせ」の様子



右：館内サインの英語訳など成果物納品の様子

動画配信

2

静岡市ってどんな街？しずおか日帰り移住体験ツアー

課題: 静岡市「首都圏テレワーカーへのプロモーション及び本市への誘致策の提案」
＜移住・定住促進モニターツアーの企画・運営・実施＞

※本事業は令和5年度「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業」の採択を受けて実施しました。

事業担当者

経営学部経営学科 教授 小豆川裕子（代表・指導教員）

参加学生（20名） 小豆川ゼミ・研究室 ○：リーダー

3年：赤堀裕斗 池ヶ谷瑠那 ○小林穂乃香 柴田真奈

2年：石川巴菜 石部燦東 岩辺愛理 佐久間梨帆 澤原歩夢 上楽紘豊 高田真良 高橋真優

中田遥 西村和海 廣野朝哉 藤浪令菜 前嶋晃成 増田朱里 松下友哉 湯野静菜

課題提出者：静岡市総合政策局企画課 移住・SDGs 推進係

協力：静岡鉄道株式会社、株式会社日本旅行、NPO 法人駿府ウエイブ

目的・概要

首都圏在住の20代～40代を中心ターゲットとし、「働く環境」「住環境」「子育て環境」等の実際の暮らしを体験していただく「しずおか日帰り移住体験ツアー」を企画・運営・実施し、関係人口の増加、誘致の促進に資することを目的に実施した。

事業成果

ゼミ生は、本研究を通じてターゲット層の設定、しずおかライフ（生活・住宅・食・医療・保健・教育・趣味）、企業・就業動向、行政の支援制度等の理解と観光資源の魅力発見ができた。モニターツアーの企画・実施についてはポイント・ノウハウのアドバイスを受けながら実施し、また、移住体験者の声から活きた知見を獲得できた。一方、静岡市総合政策局企画課 移住・SDGs 推進係は、学生のアイデア・行動力を活かした施策につなげることが可能である。同課同係からは、本市への「移住の促進」や「関係人口の創出」等の取組に大いに活用させていただきまますとの講評を頂戴した。

◇しずおか日帰り移住体験ツアー告知チラシ（表紙） ◇しずおか日帰り移住体験ツアー交流会における全体写真



動画配信 3	富士市における副業・兼業人材の活用：個人の「強み」で企業の「悩み」解決へ 課題：富士市「中小製造業の業務改善調査（副業・兼業やDXの導入による効果）」 <副業・兼業活用事例集の制作・発信>
----------------------	---

※本事業はふじのくに地域・大学コンソーシアム「令和5年度ゼミ学生等地域貢献推進事業」の採択を受け、令和4年度第2次補正予算「内閣府デジタル田園都市国家構想推進交付金」の助成事業と連携して実施しました。

事業担当者

経営学部経営学科 教授 小豆川裕子（代表・指導教員）

参加学生（18名） 小豆川ゼミ・研究室 ○：リーダー

3年：赤堀裕斗 飯野太一 池ヶ谷瑠那 石川優月 大棟奈々美 加藤純香 小林穂乃香 坂野莉流
 ○佐々木蓮 柴田真奈 鈴木菜々美 鈴木怜奈 田口真衣 多々良朱里 一杉空河 益富咲菜
 望月陽向 渡邊柊斗

課題提出者：富士市産業交流部産業支援課

協力：(株) JOINX、富士このみスタイル・このみ会、富士信用金庫、コニカミノルタジャパン（株）

目的・概要

1. 副業・兼業の活用を推進する支援機関・支援者、2. 副業・兼業を活用する実施者（受入れ企業・団体等、副業・兼業人材）の2つの視点で調査・取材を行い、成功事例集を作成することで、関係人口の増加および中小製造業を中心に市内企業の成長発展に資することを目的に実施した。

事業成果

ゼミ生は本研究を通じて、労働力減少下における多様な人材活用の1つである副業・兼業を推進する意義と、企業・団体側および人材側のメリット・デメリット、効果を生み出す要件等を理解することができた。さらにヒアリングのアポどり、ヒアリングの実践を通じて、コミュニケーション力、関係者との調整力、取材力、文章作成力、不測事態や状況変化に応じた対応力を修得することができた。

研究成果は、本学 HP、富士市 HP、ふじのくに地域・大学フォーラム、「副業・兼業マッチング交流会」等で発信、活用事例集は富士市地域産業支援センター（Be パレットふじ）、各種セミナー等で配布している。

課題提出者の富士市産業交流部産業支援課からは、今回の調査で先行して導入している事例が明確化され、この調査結果をモデルに市内企業への導入をさらに進めていきたいとの講評を頂戴した。

◇富士市における副業・兼業人材活用事例集（表紙） ◇本事業における小豆川ゼミ・研究室の全体写真



動画配信

4

令和5年度 NEXCO 中日本との共同研究 新東名高速道路 静岡 SA(上り)の価値創造に関する 情報学的研究

事業担当者

経営学部経営学科 准教授 山田雅敏 (代表)

参加学生 経営学部山田ゼミナール生 (2年生, 3年生)、常葉大学サイクリング同好会メンバー

目的・概要

本研究は、中日本高速道路株式会社(以下「NEXCO 中日本」と)と共同で、新東名高速道路にある静岡 SA「自転車の駅」の認知度向上と SA 施設の魅力を情報配信、ならびにサイクリストに向けた SA 利用者率アップ、高速道路の利用マナーの促進を目的とした。本研究の協力体制として、「世界水準の自転車都市の静岡」の実現を目指す静岡市交通政策課との産学官連携を図った。



静岡 SA「自転車の駅」

事業成果

経営学部山田ゼミナールの学生と常葉大学サイクリング同好会メンバーを中心に、「みちまるくん」サイクリングバージョン(右図参照)をデザインしたオクシズ探訪サイクリングマップが完成した。また、静岡 SA でサイクリングイベント・高速道路のマナーアップキャンペーンを実施(11/19)した。また、常葉大学学園祭(11/4)、しずおかサイクルフェス(11/19)、そして静岡駅前での再エネステーションセレモニー(12/25)では、サイクリング同好会と共同で展示ブースを出店し、サイクリングマップやマナーガイドを配布した。さらに本活動に関して、静岡市交通政策課への報告会を実施し、新聞紙面に掲載されたことから、「自転車の駅」の認知度向上と SA 施設の魅力の発信に一定程度効果があったことが示唆された。今後の課題として、静岡 SA での定期的なサイクリングイベント、およびマナーアップキャンペーンの継続した実施が望まれる。



オクシズ探訪
サイクリングマップ



オクシズ・サイクリング
イベントの実施



静岡市への報告
静岡新聞 2023/12/5 掲載

【出典】 新聞記事の掲載に関して、静岡新聞社に許諾申請済み。画像使用について肖像権も承諾済み。

動画配信
5

人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討 ～ オクシズ梅ヶ島地区の移住モデルプランの作成と実践 ～

事業担当者

経営学部経営学科 准教授 山田雅敏（代表）、講師 酒井春花、助教 堀江優希
参加学生 経営学部経営学科 西貝瑞稀、佐野由奈、加藤遥、久保田希禪（4名）

目的・概要

人口減少と少子高齢化が大きな課題となる静岡市の中山間地域のオクシズでは、人材不足による地区存続が危ぶまれる問題も発生している。そこで本研究では、オクシズ移住者を増加させるために、梅ヶ島地区の魅力を発掘・再発見することを試みた。方法として、静岡市葵区役所地域総務課と常葉大学経営学部による官学連携により、梅ヶ島地区に関する情報を収集し、「葵区オクシズお試し住宅」を活用した移住体験モデルプランを作成・実践した。

事業成果

本学経営学部生が検討・作成した梅ヶ島地区の移住体験モデルプランを実際に現地で実践し、奥静岡を紹介する情報媒体「オクシズマガジン」に掲載された（3月発刊）。また、同地区で開催された「梅ヶ島まつり」のボランティアに参加し、コースター作りのサポートを行い地域住民との交流を図った。さらに波及効果として、移住研究を行う群馬県立大間々高等学校から依頼により、本活動に関するプレゼンとスタディツアーの現地調査の帯同を行った。以上の活動により、オクシズの認知度向上、および同地区の交流人口増加の課題解決に一定程度の効果があつたと推察される。



地域総務課の方々との打ち合わせ



作成した移住モデルプランの実践



「オクシズマガジン」に掲載（3月発刊）



梅ヶ島まつりにボランティア参加



大間々高校のスタディツアー受入

※【再掲】本要旨は、令和5年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業成果報告会（静岡市）の最終報告書ならびに報告会資料に記載した内容を一部含みます。

※記載されている教員の職位及び学部・学科の名称は令和5年度のものであります。

※令和6年4月より、以下の学科の名称を変更しました。

旧	新
教育学部 初等教育課程	教育学部 学校教育課程
大学院 初等教育高度実践研究科	大学院 学校教育研究科

■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1

TEL. 054-297-6100(代表)

教育学部 外国語学部 経営学部

社会環境学部 保育学部

大学院 国際言語文化研究科

学校教育研究科

環境防災研究科

短期大学部 日本語日本文学科 保育科

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1

TEL. 054-263-1125(代表)

造形学部

短期大学部 音楽科

短期大学部 専攻科 音楽専攻

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30

TEL. 054-297-3200(代表)

法学部 健康科学部

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市浜名区都田町 1230

TEL. 053-428-3511(代表)

経営学部 健康プロデュース学部

保健医療学部

大学院 健康科学研究科



常葉大学
TOKOHA UNIV.

発行：常葉大学 地域貢献センター

発行日：令和6年9月4日

URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>